**常識にとらわれない視点で、幕末維新史を考える**

家近良樹　経済学部教授

専門分野/日本近代政治史

研究テーマ/幕末維新史の研究

担当授業/歴史学入門　日本の歴史

**史料を通して歴史上の人物と会話する**

　私は幕末期から維新期にかけて生きた有名な人物、たとえば徳川慶喜や西郷隆盛、孝明天皇などが幕末維新の政局の中で、どのような役割を果たしたのかといった疑問を常識にとらわれない視点で明らかにしたいと思っています。一般的な幕末史では、薩摩や長州が坂本龍馬などの計らいで同盟を結び、幕府を倒したとされていますが、私はそういった「英雄史観」とは全く異なる立場で研究しています。歴史学は長い間、勝者側の視点から研究されてきました。しかし歴史は勝者だけでなく敗者の視点も合わせて見ていく必要があります。政治でも仕事の世界でも、勝った側は必ず負けた側の動きも考慮して行動を起こしていくからです。勝者側に比べ敗者側の史料が少ないのが悩みですが、史料を探し出し、先入観を持たず愚直に読み解いていくのが私のスタイル。史料を通してその時代に入り込み、歴史上の人物と会話するのが、歴史学者としての至福だと思っています。

**歴史学は人間と社会を対象とする学問**

　私は特に徳川慶喜の研究者として知られているようですが、年齢や経験を重ねることで史料から読み取れるものが異なってきます。シンプルな生き方をした坂本龍馬などとは異なる、徳川慶喜の得体が知れないともいえる複雑なキャラクターに惹かれています。

　幕末維新史研究の面白さは、それが危機の時代だったことにあると思います。平和な時代では見えにくい、人間や社会の多様な側面が一挙に浮かび上がってくるからです。また、幕末期から維新期にかけての、時代が動く猛烈なスピード感も魅力です。

　授業では「日本の歴史」を担当していますが、歴史学は「人間と社会」を対象とした学問です。また、原因があるから結果があるという、歴史上の事件の因果関係を明らかにする学問でもあります。すぐに何かの役に立つものではありませんが、大きな意味で人間や社会を見ることができます。過去に存在した、とてつもないレベルの人間について学び、大きなもの深いものに対する怖れを持って生きることが大切だと思います。